中世叡尊教団と泉涌寺末寺の筑後国への展開
―新発見の中世西大寺末寺帳に触れつつ―

松　尾　剛　次

はじめに

中世における叡尊教団の全国的展開[*1]を考えるうえで，明徳2（1391）年に書き改められた西大寺末寺帳[*2]（以後，「明徳末寺帳」と略す）は大いに重要である。ところが，残念なことに「明徳末寺帳」には筑後国の分が書かれていない。それゆえ，これまで叡尊教団の筑後国における展開については論じられてこなかった。

しかしながら，たとえば筑後国竹野荘（現，浮羽郡田主丸町）は古代西大寺領であり，元弘3（1333）年6月29日には後醍醐天皇によって竹野荘地頭職が西大寺に光明真言の領所として寄進されている[*3]など，叡尊教団が筑後国に拠点寺院を有していたと推測される。実際，永享8（1436）年の「西大寺坊々寄宿末寺帳」[*4]には，「一室分」として[*5]筑後国浄土寺があがっている。また，本文で述べるように15世紀半ばの「西大寺末寺帳」にも筑後国浄土寺が見える。それゆえ，15世紀半ばにおいて，浄土寺は西大寺末寺であった[*6]。以下，浄土寺の分析を通じて，叡尊教団の筑後国における展開をみよう。

ところで，後述するように，筑後国浄土寺は西大寺末寺化する以前は京都泉涌寺の末寺であった。鎌倉時代には勅願寺・幕府祈祷寺であり，南北朝期においては室町幕府の利生塔設置寺院であるほど繁栄していた。従来，泉涌寺末寺の地方的展開についてはほとんどわかっておらず，その意味でも，この筑後浄土寺の事例は極めて重要なケース・スタデイといえよう。

第1章　西大寺末寺としての筑後国浄土寺

筑後国浄土寺は，中世の東寺宝荘厳院領三潴（みづま）荘[*7]内に位置した。酒見浄土寺とも表記され，現在の福岡県大川市酒見に所在した。現在は廃寺である。浄土寺については，『大川市誌』[*8]，『福岡県三潴郡誌　全』[*9]，『新考三潴郡誌』[*10]『福岡県の地名』[*11]『角川日本地名大辞典　福岡県』[*12]といった研究がある。とりわけ『福岡県の地名』は比較的詳しく浄土寺の歴史を論じている。また，藤本頼人の研究[*13]も，筑後川河口の中世世界を論じる中で浄土寺・風浪宮について言及し，大いに示唆に富んでおり，現在における浄土寺研究の

---

*1 叡尊教団の全国的展開については拙著『中世律宗と死の文化』（吉川弘文館，2010），拙稿「叡尊教団の河内における展開－西大寺直末寺教興寺・寛弘寺と五輪塔」（『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』8号，2011），「中世叡尊教団の薩摩国・日向国・大隅国への展開－薩摩国泰平寺・日向国宝満寺・大隅正国寺に注目して－」（『山形大学人文学部研究年報』9号，2012），「叡尊教団の紀伊国における展開」（『山形大学人文学部研究年報』10号，2013）など参照。

*2 拙著『勧進と破戒の中世史』（吉川弘文館，1995）に翻刻。

*3 『福岡県の地名』（平凡社，2004）830頁。『鎌倉遺文』41所収「元弘三年六月二十九日付後醍醐天皇綸旨」。

*4 拙著『勧進と破戒の中世史』＜前注（2）＞に翻刻。

*5 拙著『勧進と破戒の中世史』＜前注（2）＞156頁。

*6 八尋和泉「筑後善導寺の美術」『九州の寺社シリーズ筑後大本山善導寺』（九州歴史資料館，1981）41頁において，八尋氏が釈迦如来像の解説を行い，それに関して浄土寺が享徳2（1453）年に西大寺末寺となっていたことを指摘しているが，論拠をあげて論じられてはいない。

*7 三潴庄は，平治元（1159）年には東寺宝荘厳院を本家とし，四条隆季を領家としていた。その後も，鎌倉・南北朝期まで宝荘厳院，四条家は三潴庄を遠隔地荘園として保持している（瀬野精一郎編『九州荘園史料叢書14筑後国三潴荘史料』＜竹内理三発行，1976＞1頁）。三潴庄については，瀬野精一郎「筑後国三潴庄の成立と終焉」（竹内理三先生喜寿記念論文集刊行会編『荘園制と中世社会』東京堂，1984）参照。

*8 『大川市誌』（福岡県大川市役所，1977）144頁。

*9 『福岡県三潴郡誌　全』（名著出版，1973）352頁。

*10 『新考三潴郡誌』（福岡県三潴郡小学校教育振興会，1953）。

*11 『福岡県の地名』＜前注（3）＞1013・1014頁。

*12 『角川日本地名大辞典40福岡県』（角川書店，1988）699頁。

*13 藤本頼人「筑後川河口の中世世界」（藤原良章編『中世のみちと橋』高志書院，2005）。後に藤本『中世の河海と地域社会』（高志書院，2011）に収録。

到達点といえる。

まず，それらの研究の基になった『福岡県三潴郡誌』を見ると，次のように指摘されている*14。

浄土寺址　本郡酒見村風浪神社の辺にあり，伏見天皇の永仁五年勅願寺となりし僧寺にして，京都泉涌寺の末院たりしが，天正七年蒲池氏滅亡の頃，破却退転せりといふ
宝琳寺，摂取両院址　共に尼寺にして，浄土寺の附近に在り，建武の頃御祈祷寺たりし綸旨，及征西将軍宮の令旨足利直義御寄進状其他同寺に関する古文書三十余通の写今に存す

すなわち，浄土寺は（1）風浪神社の辺に所在していた，（2）永仁5（1297）年には勅願寺となった僧寺，（3）京都泉涌寺の末院で，（4）天正7（1579）年蒲池氏滅亡の頃，破却退転した，（5）浄土寺に関する綸旨など古文書30余点あまりが残っている，と指摘している。

（1）などからは，神仏習合時代であったことを考え，浄土寺は風浪神社の神宮寺であったと考えられている。（2）・（3）から，泉涌寺末の勅願寺であったと考えられていることがわかる。なお，『新考三潴郡誌』によれば，後に引用する浄土寺文書は，（5）に指摘されたもので，天正年間に浄土寺が頽廃した後で，南酒見村の庄屋助佐衛門の手に渡った*15という。

このように一応の浄土寺に関する歴史が明らかにされている。とりわけ，先述の『福岡県の地名』や藤本氏の研究では，浄土寺文書などを使って，浄土寺の歴史が要領よくまとめられている。

しかし，従来は，八尋和泉氏*16を除いて，京都泉涌寺の末寺とは考えられているが，奈良西大寺末寺とは考えられていない。それゆえ，ほとんどの先行研究でも，西大寺末寺であったことは触れられていない。そこで，まず，泉涌寺末寺から西大寺末寺に変化した*17点を史料により確認しておこう。

先述したように永享8（1436）年の「西大寺坊々寄宿末寺帳」の「一室分」に筑後浄土寺は見える。

史料（1）*18

一室分

（中略）

筑後酒見廿八代和上時寄附

浄土寺享徳二癸酉

（後略）

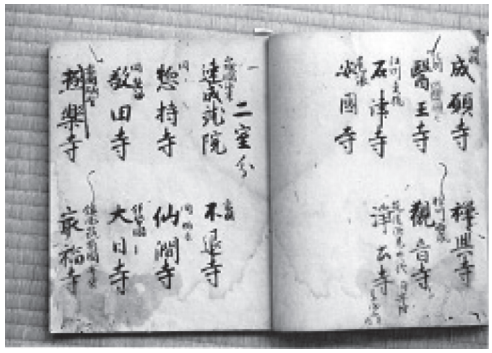


図　「西大寺坊々寄宿末寺帳」の「一室分」

「西大寺坊々寄宿末寺帳」というのは，奈良西大寺で開催される光明真言会に際して，一同に会する西大寺末寺僧がどこに宿泊するかを示している*19。それゆえ，永享8（1436）年において，浄土寺僧は光明真言会に際し，「一室」に滞在することになっていたことがわかる。はるか九州筑後国から奈良西大寺へやって来ていたのである。交通が発達していなかった中世においても，毎年，北は陸奥・出羽から南は薩摩・大隅種子島からも，とりわけ筑後国から奈良西大寺の光明真言会に集っていた。こうした中世叡尊教団のネトワークの広がりの大きさは強調しても強調し過ぎることはない。それは叡尊教団に全国から人・物・情報が集積されていたことを表しているからである。

また，浄土寺は，史料（1）の「筑後酒見廿八代和上時寄付，享徳二癸酉」という注記*20から西大寺

*14 『福岡県三潴郡誌　全』＜前注（9）＞352頁。
*15 『新考三潴郡誌』＜前注（10）＞694頁。
*16 八尋前掲論文＜前注（6）＞参照。
*17 泉涌寺末寺から西大寺末寺となった寺院として他に山城国戒光寺がある。
*18 拙著『勧進と破戒の中世史』＜前注（2）＞156頁。
*19 拙著『勧進と破戒の中世史』＜前注（2）＞161頁。

表（1）中世西大寺末寺帳の注記に見える西大寺直末寺化時期

№.	寺名	時期	典拠
1	元興寺極楽院	第九代長老	明徳
2	越後安禎寺	貞治二（1363）年	明徳
3	摂津能福寺	第十四長老御時，応安二（1369）三月九日	明徳
4	山城菩提寺	第十四長老御時，応安二（1369）年六月	明徳
5	丹後成願寺	第十五長老御時，応安六（1373）四月三日	明徳
6	伊勢常光寺	第十五長老御時，応安七（1374）九月八日	明徳
7	肥前宝生寺	第十五長老御時，永和元（1375）六月二五日	明徳
8	信濃山善寺	第十五長老御時，永和元（1375）九月三日	明徳
9	山城常福寺	第十六長老御時，永徳三（1383）二月日	明徳
10	播磨報恩寺	第十六長老御時，至徳元（1384）年八月	明徳
11	大和八木寺	第十八長老	明徳
12	大和山坊阿弥陀寺	第十八長老，明徳二（1391）年八月	明徳
13	越後曼陀羅寺	明徳二（1391）年八月廿五日	明徳
14	美濃報恩寺	十八代長老，明徳二（1391）年十月卅日	明徳
15	尾張阿弥陀寺	第十八代長老明徳二（1391）年十二月十三日	明徳
16	越中大慈院	十八代長老，明徳三（1392）年三月廿二日	明徳
17	紀伊遍照光院	十九代長老，応永五（1398）年八月廿五日	明徳
18	播磨龍華院	第十九長老応永十（1403）年十月廿七日	明徳
19	大和勝福寺	第十九長老，応永三（1396）年	明徳
20	加賀称名寺	第十九，応永五（1398）年八月廿五日	明徳
21	河内宝蓮花寺	第二十代応永十四（1407）年七月廿日	明徳
22	津観音寺	第廿一代御時，応永十八（1411）六月日	明徳
23	出羽菩提寺	第廿一代和上，応永十八（1411）年七月一日旦那小野寺殿当寺附了	明徳
24	大和菩提寺	第廿一代和上	坊
25	近江石津寺	第廿二長老御代応永廿（1413）年八月十日	明徳
26	肥後霊山寺	永享八（1436）年卯月十六日	明徳
27	近江常福寺	廿七代ニ寄進	明徳・坊
28	山城寿福寺	第廿七代	明徳
29	大和大善寺	第廿七代良誓	明徳・坊
30	大和極楽寺	第廿七代	明徳・坊
31	摂津法薗寺	第廿七代長老ニ寄進	明徳
32	播磨餝万寺	第廿七代文安四（1447）年八月日	明徳・坊
33	近江福泉寺	第廿七代文安五（1448）年四月日	明徳・坊
34	近江長安寺	廿七代和上文安五（1448）年寄進	明徳・坊
35	近江法薗寺	廿七代ニ寄進今ハ薬師院被返了	明徳・坊
36	筑後酒見浄土寺	廿八代和上時享徳二（1453）年	坊

典拠欄の「明徳」とは明徳二年の「西大寺末寺帳」，「坊」とは永享八年の「坊々寄宿末寺帳」を指す。いずれも拙著『勧進と破戒の中世史』（吉川弘文館，1995）所収。

第28代長老の時である享徳2（1453）年に西大寺末寺として寄付されたことがわかる。なお，西大寺第28代長老（1450～1457年在位）とは元澄*21のことである。

さらに，「二室分」として

史料（2）*22

二室分

（中略）

九州筑後国

大琳寺

（後略）

*20 拙著『勧進と破戒の中世史』＜前注（2）＞161頁。
*21 「西大寺代々長老名」（『西大寺関係史料（一）諸縁起・衆首交名・末寺帳』，奈良国立文化財研究所，1968）74頁。
*22 拙著『勧進と破戒の中世史』＜前注（2）＞156頁。

史料（2）のように大琳寺も挙がっている。それゆえ，大琳寺も末寺として光明真言会に参加していたのだろう。ただ，この大琳寺は肥後菊地の大琳寺の可能性が高く*23，ここでは扱わない。

以上のように，筑後国にも叡尊教団の末寺が存在し，浄土寺が享徳2（1453）年以来は西大寺末寺となっていたのである。

それゆえ，第3章で紹介する15世紀半ばの「西大寺末寺帳」には

史料（3）*24
筑後國
　浄土寺酒見

と見える。

この「西大寺末寺帳」は，（1）作成年が書かれていないこと，（2）越後国，播磨国分が翻刻ミスで書かれていない*25ことなどから，従来，全く使用されてこなかった。しかし，筑後国浄土寺が書かれていることなどから逆に作成年代をほぼ限定できる。

まず，浄土寺が末寺となったのは，先述の通り享徳2（1453）年以来である。それゆえ，浄土寺が記載されているとすれば，1453年以後の作成である。とりわけ，他の中世の「西大寺末寺帳」の注記を検討すると，表（1）のように，筑後浄土寺がもっとも新しく直末寺となっている。

また，末寺帳の末尾に「奉行　尊光，高算」*26とあるので本「西大寺末寺帳」の作成者は，尊光と高算である。その二人の内，高算については「西大寺長老次第」に「第二十九高算和尚　明圓上人住持十五年文明三辛卯十二月十二日寂八十歳」*27とある。すなわち，第29代西大寺長老で，15年間長老位に就き，文明3（1471）年12月12日に80歳で死去していることがわかる。高算が末寺帳の作成を担当したのは長老就任以前であろうから，1457年以前であろう。とすれば，本末寺帳は，1453年から1457年までの間に作成されたことになる。

さらに注目すべきは，本末寺帳は「下書」で以後の加筆がなされていない点も重要である。「明徳末寺帳」も，永享の「西大寺坊々寄宿末寺帳」も後の時期に加筆が行われている。この点，本末寺帳は下書きであったゆえか，以後の加筆はないという大きな特徴がある。これまで，中世「西大寺末寺帳」は2つしか知られてこなかったが，新たな中世「西大寺末寺帳」が見つかったことになる。

この筑後国浄土寺は寛永10（1633）年の西大寺末寺帳*28には見えない。天正9（1581）年蒲池氏滅亡の頃，破却退転したといわれる*29。天正9年頃には廃寺となっていたのであろうか。そこで，次章で浄土寺の歴史を見てみよう。

第2章　筑後国浄土寺の役割

先述のように中世浄土寺に関しては，比較的史料が多く残り，先行研究もそれを使って書いている。だが，専論はない。浄土寺は研究の少ない泉涌寺系の律寺から西大寺末寺へ変わったのであり，ここで論じておこう。

筑後地域の優れた地誌である『校訂筑後志』によれば，「浄土寺・宝琳寺両古址」として「共に三潴郡酒見村風浪社の辺にありて七堂伽藍の大寺」*30とある。かつての浄土寺の繁栄ぶりが偲ば

*23 筑後は肥後の間違いであろう。拙著『勧進と破戒の中世史』＜前注（2）＞151頁参照。
*24 「西大寺末寺帳（四）」（『西大寺関係史料（一）諸縁起・衆首交名・末寺帳』＜前注（21）＞）125頁には酒見浄土寺が記載されている。
*25 「西大寺末寺帳（四）」＜前注（21）＞124頁。
*26 「西大寺末寺帳（四）」＜前注（21）＞127頁。
*27 「西大寺代々長老名」＜前注（21）＞74頁。
*28 「西大寺末寺帳（三）」＜前注（21）＞。
*29 『福岡県の地名』＜前注（3）＞1013頁では，蒲池鎮並が殺害されたのは天正9（1581）年5月27日であり，蒲池氏の没落と浄土寺の廃絶が関係するとすれば，それ以後であろうとする。なお，蒲池氏については大城美知信・田渕義樹『蒲池氏と田尻氏』（柳川の歴史2）を参照。ただ，問題となるのは文亀2（1502）年に校合された先述の「明徳末寺帳」に浄土寺が記載されていない点である。「明徳末寺帳」には，文亀校合の年に追記された寺もあり，それゆえ，浄土寺は文亀2年頃には西大寺末寺から離脱していたのであろう。釈迦像が善導寺に移ったのも，その頃であろうか。

れる。なお，『筑後地鑑』によれば，風浪宮の祭神は唐の通留山の風浪将である。神宮皇后の三韓征伐に際し，軍艦風波の災難を救ったので，皇后は帰国後，この地に請じて祀ったという*31。

また，藤本氏の研究*32によれば，浄土寺・風浪宮は榎津を中心とした酒見地区一帯の中核に位置したと考えられている。

ところで，注目すべきことに，筑後善導寺に伝わる釈迦像の胎内銘には教空，顕空といった浄土寺僧名が見える*33ことから，その釈迦像はかつて浄土寺の本尊であったと考えられている。すなわち，釈迦像の胎内銘には数多くの結縁者名と仏師湛誉，湛真の名が記されている。

史料（4）*34

沙門教空

正和三年十一月初一日

小比丘顕空　　小沙弥□清

小比丘聖心　　小沙弥知真

小比丘尊海　　小沙弥□□

小比丘祐尊　　小沙弥超永

小比丘善空　　小沙弥玄恵

（18名ノ名ヲ略ス）　　大仏師　法橋湛誉

法橋湛真

大檀那菩薩戒比丘善性　沙弥教覚

（阿弥陀，観音，勢至ノ梵字）南無阿弥陀仏

尼慈妙聖霊

頓証聖霊□悟

（以下，略）

史料（4）は，釈迦像の胎内胸腹部の墨書銘である。その部分だけでも正和3（1314）年11月1日付けで少なくとも29名の僧侶の名と仏師湛誉・湛真の名が記載されている。湛誉・湛真は湛派の仏師と考えられている。29名の僧たちは本像の造立に結縁した僧で，筑後浄土寺の僧が中心であろう。というのも，八尋氏*35の指摘されるように，僧の中心人物教空は史料（5）のように，浄土寺住持として「殺生以下禁断」を鎌倉幕府に申請し，それを認められている。また，次行に記された顕空は嘉暦4（1329）年の「鎮西探題裁許状」*36に浄土寺住持として見える。とすれば，浄土寺は29名ほどの住僧のいる寺院であったと推測される。また，そのほか，他の部位にも数多くの結縁者名前が記されている。このように，本胎内銘は泉涌寺末寺時代の筑後浄土寺の実態を示す貴重な史料といえよう。

ことに，史料（4）の部分からは，善性を大檀那として尼慈妙の霊の「頓証菩提」が願われていることがわかる。胸腹部という中心部に書かれており，それが本釈迦像造立の主な狙いだったのであろう。また，他の部分にも，尼の名が散見され，彼女たちは宝琳寺や摂取院という尼寺の関係者かもしれない。

史料（5）*37

筑後国酒見村浄土寺住持僧教空申，殺生以下狼藉之事，

右，如申状者，去永仁五年九月廿一日，可為勅願寺之由，被下綸旨畢，任傍例，可令禁断寺領内殺生，停止武士以下甲乙人乱入狼藉之由，欲被仰下云々者，早任申請旨，可令禁遏之状，鎌倉殿仰，下知如件，

正安二年十月十六日

陸奥守平朝臣（北条宣時）判

相模守平朝臣（北条貞時）判

史料（5）は，永仁5（1297）年に勅願寺化したことを踏まえて，寺領内の殺生禁断と武士以下甲

*30 『校訂筑後志』（本荘知新堂，1907年）230頁。
*31 『校訂筑後地鑑』（歴史図書社，1977）49～52頁など参照。
*32 藤本「筑後川河口の中世世界」＜前注（13）＞。
*33 『角川日本地名大辞典40福岡県』＜前注（12）＞699頁。
*34 『筑後大本山善導寺歴史資料調査目録』（九州歴史資料館，1981）81頁。
*35 八尋「筑後善導寺の美術」＜前注（6）＞41頁。
*36 『筑後国三潴荘史料』＜前注（7）＞70頁。
*37 『筑後国三潴荘史料』＜前注（7）＞46頁。

乙人乱入狼藉の停止を求めた浄土寺住持教空の申請を認めた正安２（1300）年10月16日付関東御教書である。それにより，永仁５年以来勅願寺であったことがわかる。また，教空が住持であったことも明らかである。

また，嘉暦４（1329）年４月16日付の鎮西探題下知状写によれば，鎌倉幕府の祈祷寺であった*38点にも注意する必要がある。

史料（6）*39

下　筑後国三潴庄酒見村浄土寺

可早任先御寄付旨，以敷地四至墩内并料田等，永代為一圓寺領事

右，彼寺草創以降，申入子細於本所，抽御祈祷忠精之間，本名主覚法并沙門教空田園＜田数漆町余云々，加両尼寺分定＞等，寄進之刻，任申請，去正安元年被成御下文畢，加之乾元堤修固之時，梁河村内荒野貳拾町被寄付畢，然者仏陀施与之地悔返之上者，縦当庄平均雖有中分沙汰，於彼寺領者，不可有折中之儀，永代為一圓寺領，弥可奉祈領家御繁昌云々者，早任申請，更不可違乱之状，所仰如件，庄家宜承知，敢勿違失，以下

文保元年三月　日　　沙弥称念　判

※　＜　＞内分チ書キ

史料（6）は，文保元（1317）年３月付けで，領家方の沙弥称念が，覚法・教空によって浄土寺・宝琳寺・摂取院分として寄付された土地などの一圓領支配を認めている。もっとも，本文書の奥には「前僧正法印大和尚」の奥上所判があるべきで，発給主体は領家（三潴庄領家四条家の菩提寺鷲尾山金山院）と考えられている*40。

先述のごとく，正安２（1300）年には浄土寺住持であった教空は，史料（6）のように土地を本名主覚法とともに浄土寺へ寄付している。それゆえ，教空は地元の出身者かもしれない。浄土寺は教空の代に風浪宮の神宮寺として中興されたのだろうか。

史料（7）*41

泉涌寺末寺，筑後国浄土寺并宝琳寺，宜為御祈祷所者，天気如件，仍執達如件

建武元年六月十八日　　左衛門権佐（岡崎範国）　判

史料(7)から，浄土寺と宝琳尼寺が建武元(1334)年段階では泉涌寺末寺であり，また，後醍醐天皇の祈祷所であったことがわかる。先述のように宝琳寺は，先の摂取院とともに浄土寺の近辺に所在した尼寺で，浄土寺の末寺であった。おそらく，宝琳寺と摂取院は浄土寺とペアになって成立した尼寺であろう。

肥前万寿寺にあった鐘の銘文によれば，本来，それが風浪宮のものであったことがわかる。さらに，それは応永21（1414）年に浄土寺・風浪宮・摂取院らの人々の協力によって制作されたことがわかり，それらの繋がりの強さが窺われる*42。叡尊教団においても，僧寺と尼寺はペアになって樹立されることがあった*43が，泉涌寺系における事例として注目される。

浄土寺の中世史において，一大画期の一つは，室町幕府下において利生塔設置寺院となったことである。

史料（8）*44

筑後国酒見浄土寺塔婆事，為六十六基之随一，寄料所可造立之状如件

暦応三年十二月十三日　　左兵衛督（足利直義）　判

浄土寺長老

*38 藤本「筑後川河口の中世世界」＜前注（13）＞41頁。『筑後国三潴荘史料』＜前注（7）＞70・71頁。

*39 『筑後国三潴荘史料』＜前注（7）＞59・60頁，または『鎌倉遺文』35，101・102頁所収「筑後浄土寺文書」文保３(1319)年３月日付「称念下文」。本文書については藤本『中世の河海と地域社会』＜前注（13）＞219頁，服部英雄「柳川の地名地図」（『地図のなかの柳川－柳川市史　地図編』柳川市史編集委員会，1999）など参照。

*40 藤本『中世の河海と地域社会』＜前注（13）＞219頁。

*41 『筑後国三潴荘史料』＜前注（7）＞72頁。

*42 藤本「筑後川河口の中世世界」＜前注（13）＞42・43頁。

*43 たとえば金沢称名寺と海岸尼寺のケースがある。そのほかに紀伊利生護国寺と妙楽尼寺（拙稿「叡尊教団の紀伊国における展開」＜前注（1）＞）などもある。

*44 『筑後国三潴荘史料』＜前注（7）＞76頁。

史料（9）*45

奉安置筑後国浄土寺塔婆

　　仏舎利二粒　一粒東寺

右，於六十六州之寺社，建一国一基之塔婆，忝任申請，既勅願，仍東寺仏舎利，各奉納之，伏冀皇祚悠久，衆心悦怡，仏法紹隆，利益平等，安置之儀，旨趣如件

　　暦応四年正月一日　左兵衛督源朝臣直義（足利）　判

史料（8）のように，暦応3（1340）年12月13日には浄土寺は室町幕府が66国に設置した利生塔設置寺院の1つに指定された*46。史料（9）によれば，暦応4（1341）年正月1日には東寺の仏舎利1粒が浄土寺に奉納されている。

このように，室町幕府，とりわけ北朝方の宗教的拠点であった。しかし，征西将軍が九州で勢力をもっていたころには，南朝方の征西将軍の祈祷所になっていたことも注目される*47。

以上のように，泉涌寺末寺時代の浄土寺が，永仁5（1297）年には伏見天皇の勅願寺であり，また後醍醐天皇の祈祷所であった。室町時代においては室町幕府の利生塔設置寺院であったりと，筑後国において，非常に重要な役割を担っていた寺格の高い寺院であったことは明らかである。近年は，ようやく泉涌寺系律宗の鎌倉や京都での活動も注目されるようになった*48が，九州地域においての浄土寺の存在にも大いに注目される必要がある。

とりわけ，京都泉涌寺開山俊芿は肥後国の出身で，肥後正法寺（現，熊本県玉名市，現在は廃寺）などを開いた*49。おそらく肥後地域は，俊芿の重要な布教地域であったと推測される。正法寺からは有明海沿いのルートで筑後浄土寺にいたったのであろう。

その後，注目すべきことには享徳2（1453）年には西大寺末寺となっていた。残念ながら西大寺末寺時代の史料がないために，西大寺末寺浄土寺の役割を史料的に明らかにすることはできない。そこで，他の西大寺末寺の役割から推測してみよう。

まず，浄土寺は筑後川水系の花宗川沿いにある。先述の藤本氏*50によれば，浄土寺・風浪宮は筑後川河口に位置した榎津を中心とする中世世界の中核的な位置にあったという。すなわち，榎津という津が筑後川河口に所在し，風浪宮の参道は筑後川に向い，風浪宮は筑後川を上下する船舶の安全を祈願する神社であったという。服部英雄氏は，中国明の日本を紹介した書物である『籌海図編』『日本考』に筑後の榎津があげられていることを紹介し，榎津が筑後国府の津の役割を果たしていたと推測している*51。

ところで，諸国の西大寺末寺が河川の管理や港湾管理を担当していたことは周知のごとくである*52。鎌倉極楽寺による和賀江津管理，金沢称名寺による六浦津管理は有名であるが，九州においても，利生塔寺院で川内川を押さえていた薩摩泰平寺，同じく利生塔寺院で島津庄の外港志布志津を押さえた志布志宝満寺が想起される*53。とすれば，浄土寺も花宗川の管理，とりわけ，筑後国府の津の役割を果たしていた榎津*54を管理したのかもしれない。今後は利生塔設置寺院と津などの交通路支配との関係についても大いに注目する必要がある。

また，風浪宮の神宮寺であった可能性が高い。この点も，西大寺末寺が勧進機能を担っていたこ

*45 『筑後国三潴荘史料』＜前注（7）＞76・77頁。
*46 安国寺・利生塔については，拙著『日本中世の禅と律』（吉川弘文館，2003）第2部第4章「安国寺・利生塔再考」を参照。
*47 『筑後国三潴荘史料』＜前注（7）＞92頁。
*48 大塚紀弘「中世都市京都の律家」（『寺院史研究』10，2006），大森順雄『覚園寺と鎌倉律宗の研究』（有隣堂，1991）など参照。
*49 『不可棄法師伝』（『續群書類従』9上），西谷功「資料翻刻『泉涌寺不可棄法師伝』」（『御寺泉涌寺と開山月輪大師』泉涌寺，2011）。俊芿の肥後における活動については『玉名市史通史編上』（玉名市，2005）が詳しい。
*50 藤本「筑後川河口の中世世界」＜前注（13）＞。
*51 服部『景観にさぐる中世』（新人物往来社，1995）。
*52 拙著『中世律宗と死の文化』＜前注（1）＞191頁など参照。
*53 拙稿「中世叡尊教団の薩摩国・日向国・大隅国への展開－薩摩国泰平寺・日向国宝満寺・大隅正国寺に注目して－」＜前注（1）＞。
*54 服部『景観にさぐる中世』＜前注（51）＞188頁。藤本「筑後川河口の中世世界」＜前注（13）＞参照。

とから，浄土寺も風浪宮の勧進機能を担っていた可能性を指摘しておこう*55。

第3章　もう一つの中世「西大寺末寺帳」

第1章で論じたように，筑後浄土寺が享徳2（1453）年に西大寺末寺になったことなどから，もう一つの中世「西大寺末寺帳」の存在が明らかとなった。そこで，以下に紹介する。

本末寺帳は，すでに「西大寺末寺帳（四）」として『西大寺関係史料（一）諸縁起・衆首交名・末寺帳』*56に翻刻されている。しかし，それには，残念なことに越後国，播磨国分がミスで翻刻されていない。

大きさは縦33cm×横23cmで，冊子本である。表紙に「西大寺末寺　下書」とある。西大寺における所蔵番号は132函10号である。

表紙右端に「西大寺諸國末寺　下書」とあり，下書きであったらしい。そのことは，伊勢国，陸奥国分などに小さな文字で末寺の追記がなされている点によく表れている。

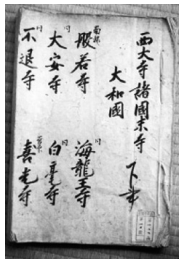
さらに，他の末寺帳に見えない，本来極楽寺末寺であったはずの奥州や武蔵の末寺や尼寺が記載されている点でも貴重である*57。明徳2（1391）年に書き改められた「明徳末寺帳」では，「参河国以東諸末寺，多分，極楽寺に属す」*58とある。それゆえ，奥州や武蔵国の末寺が記されているのは注目される。

ただし，注記は，たとえば山城速成就院に付けられた「大谷五条」のように，速成就院が栗田口から五条に移転した慶長8（1603）年以後，すなわち後世に付けられたものもある*59。

なぜ，1453年から1457年までの間に本末寺帳が作成されたのかははっきりしないが，末寺役・銭の徴収などのために，「明徳末寺帳」「西大寺坊々寄宿末寺帳」以後の末寺の変化を書き留める必要が生じたのであろう。

以下，写真とともに翻刻する。

西大寺諸國末寺　下書



大和國

南都 般若寺
同 大安寺
同 不退寺
平群郡會峯 額安寺
三輪若宮 大御輪寺
惣持寺
高尾 神願寺
ヲキ田　ヲキ田 福田寺
楢原 仙澗寺
フセ 羂索院
楢原　楢原 三鈷寺
常樂寺
市原　市原 迎攝寺
布施　上保寺 圓福寺
宇智郡　宇野 觀音院
同　二見 大日寺
長安寺
八木寺
吐田 勝福寺
高樋 来迎寺
北横田庄 極樂寺
笠 竹林寺
同 福智院
森本 本光明寺
法隆寺内 北室

同 海龍王寺
同 白毫寺
菅原 喜光寺
万歳 最福寺
箕田 敬田寺
吉野郡 現光寺
香久山三学院 三學院
南都 小塔院
フセ 三寶院
ユキ 高福寺
磯野 極樂寺
宇田郡芳野 神宮如法院
宇多アカハ子 佛隆寺
吉野塔尾 如意輪寺
秋篠寺 文殊院
佐備 神宮寺
南都 極樂院
山坊 阿彌陀寺
宇智郡牧野 大善寺
南都 知足院
壽福寺
南都 不空院
同 圓證寺
高市郡橘寺 菩提寺
大聖無動寺

*55 拙稿「仏教者の社会活動」『新アジア仏教史12日本Ⅱ躍動する中世仏教』，佼成出版，2010）。
*56 『西大寺関係史料（一）諸縁起・衆首交名・末寺帳』＜前注（21）＞。
*57 奥州分の筆頭に書かれている長福寺は現在の福島県いわき市に所在する。「長福寺縁起」などによれば，元亨2（1322）年に小川義綱によって，鎌倉極楽寺了俊の弟子慈運を開山として開かれたという。このように，14世紀には極楽寺末寺であった。それが，本末寺帳に記載されたことは，15世紀半ばには極楽寺から西大寺へと本寺が変化したことになろう。なお，長福寺については西岡芳文ほか「福島県いわき市長福寺本尊地蔵菩薩座像と納入文書－概報」（『金沢文庫研究』330，2013）が大いに参考になる。
*58 拙著『勧進と破戒の中世史』＜前注（2）＞137頁。
*59 拙著『中世律宗と死の文化』＜前注（1）＞165頁。

山城國

淨住寺葉室
大乘院八幡神宮寺也
放生院宇治
法光明院西谷
常福寺京中御門西洞院
觀音寺相樂郡木幡觀音寺
桂宮院ウツマサ
戒光寺
平等心王院槙尾寺也
大谷五條 速成就院
不壞化身院 大覺寺
三条大宮 長福寺
醍醐 菩提寺
山田庄 壽福寺
極樂坊
京八條大通寺也 遍照心院
成心院
宇治常光院也 橋寺

河内國

西琳寺
真福寺丹南郡
寛弘寺
西方寺六辻
薬林寺
神弘寺
寶蓮華寺譽田奥院
教興寺
泉福寺
千光寺
金剛蓮花寺
廣成寺
寶泉寺

和泉國

禅寂寺
来迎寺
大鳥 長承寺
淨弘寺

攝津國

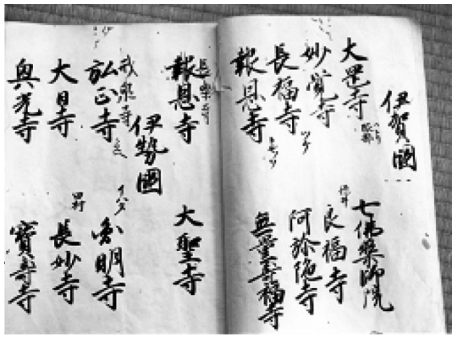
薬師院天王寺
莊厳淨土寺住吉
慈光寺神崎
安養寺奥堂
吉祥寺椋橋寺
法薗寺猪名寺
安樂寺マキ
多田院
鷹合 妙臺寺
東アシヤ 東光寺
兵庫 能福寺
同八王子也 觀音寺
椋橋寺 極樂院

伊賀國

大岡寺服部
妙覺寺
長福寺ツケ
報恩寺トモノヲ
長樂寺
七佛藥師院
徳井 良福寺
阿彌陀寺
無量壽福寺
報恩寺
大聖寺

伊勢國

戒泉寺
弘正寺クスヘ
大日寺
興光寺
圓興寺
福善寺
圓明寺イハタ
田村 長妙寺
寶壽寺
常光寺
クワナ 大福田寺



近江國

二階堂 寶蓮院
石津寺
伊香郡 長安寺
常福寺
佐々木 慈恩寺
福泉寺
法薗寺
高嶋郡新城庄ほりかわ 阿弥陀寺

尾張國

釋迦寺田嶋
圓満寺
安國寺
長卷 圓光寺
金勝寺
國分寺

美濃國

山田 松蔵寺
小松寺
大井 長康寺
報恩寺

信濃國

盛興寺二科
山善寺

越前國

金津 神宮護國寺
長福寺兵庫郷新宮村
兵庫 大善寺

加賀國

月輪寺（月影）　西光寺（吉光）
神宮寺　明星寺（二口）
寶光寺　稱名寺（トクミツ）
國分寺

越中國

禅興寺（曽禰）　弘正寺（長澤）
寶薗寺（黒何）　聖林寺（野尻）
大慈院（今ハ号長徳寺）　圓満寺
國分寺

越後国

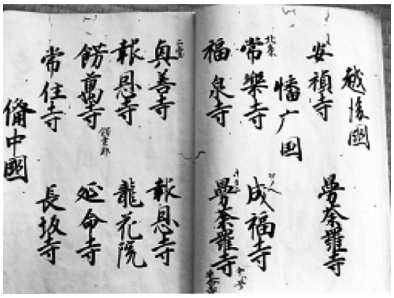
安禎寺　曼荼羅寺

播磨国

常楽寺（北条）　成福寺（ヲノヘ）
福泉寺　曼荼羅寺（サタニ）今ハ号延命寺
興善寺（二堂）　報恩寺
報恩寺　龍華院
餝万寺（餝東郡）　延命寺
常住寺　長坂寺

備中国

この部分，未翻刻



善養寺（ナリウ）（成羽）　金光寺
菩提寺（カルヘ）

備後國

淨土寺　常福寺（クサイツ）（草出）

金剛寺（イマ高野大田庄）

周防國

淨寶寺　國分寺
安樂寺法花寺
長願寺長童寺

長門國

國分寺（府）　律成寺
淨名寺（コトウ）　蔵福寺（同）
長光寺（アサ）　善興寺

安藝國

丹後國

金光明寺（志樂）　金剛心寺（ヒヲキ）
泉源寺　成願寺
國分寺

但馬國

常住金剛寺　花蔵寺
金光明寺

石見國

正法寺

紀伊國

金剛寺　利生護國寺（スダ）
妙樂寺（橋本）　福林寺（トヨ田）
岡林寺（新宮）　西福寺
觀音寺　光明寺
寶金剛寺　寶光寺
遍照光寺（院高野）

阿波國

高林寺　成願寺
觀音寺

讃岐國

鷲峯寺　普賢寺（ヤシマ）

國分寺　屋嶋寺

伊豫國

國分寺　興法院

土佐國

筑前國

大乗寺[博多]　最福寺[宰府]

安養院　神宮寺[田村]

長福寺[江ノ]

筑後國

淨土寺[酒見]

出雲國

報恩寺

豊前國

大興善寺[規矩郡 紀玖郡]　寶光明寺

寶勝寺[ミヤコ]　大樂寺[宇佐]

常福寺[城井]　觀音寺[ミヤコ][城]

中願寺　万福寺[中津河]

觀音寺

豊後國

金剛寶戒寺[府中]　永興寺[日田]

最勝寺[佐伯庄]　潮音寺

神宮寺

肥前國

東妙寺[田手]　法泉寺

寶生寺[ソノキ][彼杵大村]

肥後國

淨光寺　天福寺

大琳寺[菊地]　春日寺

金剛光明寺[山鹿]　觀音寺[河尻]

靈山寺　玉泉寺[八代]

大隅國

正國寺[宮内]　慈音寺

薩摩國

泰平寺[河内 川内]

日向國

寶満寺[志布志]　寶泉寺

因幡國

國分寺

常陸國

平福寺

下総國

大慈音院

下野國

真福寺[小山]

出羽國

菩提寺[マ井キ]

相模國

極楽寺

伯耆国

國分寺

武蔵國

稱名寺　海岸寺[金澤]

常福寺[同]　正福院

奥州　長福寺[岩城小川村]　長樂寺

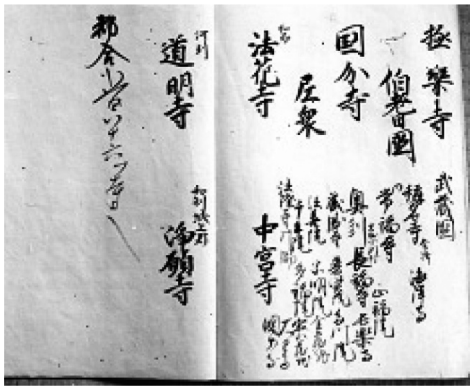
蔵勝寺　普賢院　多門院

法善院　宗明院　金蔵院

千手院　多福院　密蔵院

大王寺

國分寺



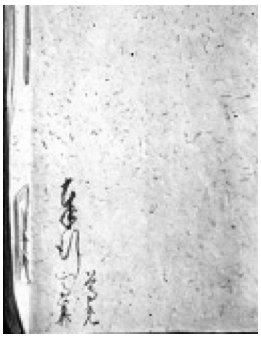
尼衆

和州
法花寺　　法隆寺門脇
中宮寺

河州
道明寺　　和州城上郡
淨願寺

都合貳百八十六ヶ寺也

奉行　尊光
　　高算



おわりに

以上，第１章で浄土寺が中世において泉涌寺末寺から西大寺末寺へ変化していたこと，第２章では，浄土寺の歴史的変遷を追い，第３章では新たに見つかった中世「西大寺末寺帳」を翻刻・紹介した。

筑後浄土寺は，西大寺末寺としてよりも，それ以前の泉涌寺末寺時代の役割が極めて大きなものであったことがわかる。花宗川の畔に立地し（河川・津支配），風浪神社の神宮寺であったこと（神宮寺として本社の勧進・葬送などを担う），宝琳寺・摂取院という尼寺を押さえていた（尼寺をペアとして創建する）点など，叡尊教団にもいえる活動である。

このように，泉涌寺系の律寺も中世において重要な果たしていた寺院が存在したのである。とりわけ，浄土寺が享徳２（1453）年に西大寺末寺となったことが分かることなどから，新たな中世「西大寺末寺帳」の存在が明らかとなった。

附記：2013 年 5 月 4 日に柳川古文書館を訪問し，学芸員の田淵義樹氏から多くのご教示を得た。記して感謝の意を表したい。また，本研究は，平成 25 年度科学研究費「中世叡尊教団の全国的展開」の成果の１つである。

The Development of the Eizon Order during the Middle Ages in Chikugo Province

Kenji MATSUO

This paper aims to clarify how the Eizon Order developed in Chikugo Province (modern Fukuoka Prefecture) during the Middle Ages. Now a ruin, Jodo Temple, a branch temple of the Saidai Temple in Nara, was located at that time in Chikugo and was headquarters of the Eizon Order. In this paper, the author will focus on identifying when it became an Eizon Order branch temple and what role it played, and also introduce a newly-found list of 15th century Saidai Temple branch temples.